

第三者意見

高崎経済大学経済学部教授
水口 剛 氏



御社は、昨年に引き続き、多くの外部有識者の声を聞き、サプライチェーンの実態調査も継続されています。また、今年新たに経営理念を改訂し、グローバル・コンパクトにも署名し、150周年記念事業も始まる等、たいへん「やる気」の伝わる報告書だと思えます。CSRはすべての企業にとって重要ですが、特に御社のような総合商社が取組むことには特別な意義があると考えます。なぜなら、一方で商社活動はネガティブなインパクトが大きいのではないかと社会から見られることが多く、他方で商社機能を発揮することでさまざまな問題の解決ができるのではないかと期待も大きいからです。

商社のCSRで難しいのは、活動する事業分野が極めて多様だという点です。世界中のあらゆる場所で、あらゆるものを取扱うがゆえに、持続可能性に関わるあらゆる問題に関係する可能性があります。水問題、食糧問題、資源開発、生態系の保全、気候リスク対策、化学物質、途上国・最貧国の経済発展、現地の人権問題等、商社と縁のない問題はないと言ってもよいでしょう。直面する問題は事業分野ごとにまったく違うはずですから、それぞれの事業で最重要課題は何かを考える必要があります。その意味で、全社共通の企業理念とCSR推進基本方針の下、具体的な取組はディビジョンカンパニーごとにCSR活動アクションプランを定めて行うという方法は適切だと思えます。

もうひとつの課題は、全体像がつかみにくいことです。取扱商品が膨大なこともあります。取引ごとに影響力の及ぶ範囲が違うので、どこまでが自社の活動の成果であり、また責任なのかというバウンダリー（境界）の設定が難しいのです。売り手や買い手が実質的な決定権を握っている場合から、事業投資のように御社自身が強い力を持っている

場合までさまざまでしょう。しかしたとえそうだとすると、問題領域ごとに全体像をつかんでおくことは大切だと思えます。

例えば150周年記念事業のひとつのボルネオ島熱帯林再生プログラムは非常に前向きで有意義なことだと思えますし、社員の方の参加も素晴らしい。そして商品別環境リスク評価による管理についても書かれています。だからこそ、木材や森林に関わる事業の全体像を示し、「一方で植林しつつ、他方で伐っているのではないか」という読者の疑問に答えておく必要があるのではないのでしょうか。そのほかにも資源開発における途上国への影響や生態系保護、バイオ燃料と食糧問題の関係など、ネガティブな影響が疑われやすい分野こそ、トピックだけでなく全体像をきちんと把握して説明することが信頼につながると思えます。

一方、Highlightで紹介された太陽光ビジネスやプレオーガニックコットンプログラム、機械カンパニーを中心としたウォーターフォーラムなど、多くの技術やノウハウ、企業等を結びつけて問題解決につながるビジネスを生み出していく力は、伊藤忠商事ならではのものだと思います。熱帯雨林同盟認定のコーヒー豆や「地球樹」事業、CDM事業等、主要取組事例で取上げられた一つひとつに感心しています。構想力と実行力のある有能な商社マンたちが、「事業活動を通じて社会に貢献する」という御社のCSRの理念を世界中で実践し始めたら、いかに多くのことが実現できるだろうかと強く期待しています。

CSR Report 2009 編集タスクフォースメンバー

- 繊維カンパニー
- 機械カンパニー
- 情報通信・航空電子カンパニー
- 金属・エネルギーカンパニー
- 生活資材・化学品カンパニー
- 食料カンパニー
- //
- 金融・不動産・保険・物流カンパニー
- //
- 業務部
- 事業部
- 広報部

- 新城 正受
- 今西 洋晶
- 細辻 享子
- 千村 裕史
- 三嶋 章夫
- 吉本 充弘
- 工藤 拓
- 福田 英昭
- 赤木 信太郎
- 鈴木 隆
- 早川 誠
- 山中 直樹

- IR室
- 海外市場部
- リスクマネジメント部
- 人事部
- 法務部
- 総務部
- 総務部 CSR推進室
- //
- //
- //
- //

- 渡辺 聡
- 山本 志乃
- 東條 陽士
- 大久保 康弘
- 太田 頼子
- 西山 照美
- 高井 通彰
- 桜本 朱美
- 雨宮 香織
- 佐藤 緋紗
- 中山 比呂子